

関西理学療法学会 一泊研修会 ナイトセミナー 『治療と変化について考える』

「感覚入力・感覚受容とそれに伴う運動の変化について」

医療法人社団石鎚会 田辺中央病院

末廣 健児

臨床場面において、治療の目的として「感覚入力を図る」という場面は多い。もちろん、すべての姿勢や動作には常に環境や身体の状態の変化に伴う感覚情報の変化が生じており、意識せずとも「全ての治療が感覚入力を伴っている」ともいえる。その中で、より感覚入力を主眼に置く場合は、それらの感覚を強調して入力することで患者に感じてもらいやすくするなど、何らかの工夫をされているセラピストが多いのではないだろうか。

セラピストの側から感覚入力を図ったとき、それがどのように患者に受容されたかによって、運動の質は異なってくる。つまり、こちらがどのような感覚を与えたかということよりも、患者がどのように感じ受け止めたか、ということが重要である。ただ、どのように患者が感じているかということについて、客観的な評価をすることは非常に難しい。実際の臨床場面においては、患者の反応や表情を常に観察し、それをセラピストが感じ取りながら治療を展開していくことが要求される。

一口に「感覚」といっても、体性感覚・特殊感覚・内臓感覚など様々な感覚があり、そのすべてが運動に関与しているが、今回はその中でも特に「固有感覚」に着目する。「固有感覚」は筋・腱・関節にある固有受容器により提供される、身体の運動や位置についての情報であり、身体がどのように動いたか（変化したか）を捉えるために大きな役割を果たしている。実際に我々が臨床でおこなっている固有感覚入力の実技を体験して頂きながら、感覚入力・感覚受容が運動に及ぼす影響について改めて見直す機会にして頂きたいと考えている。